

『筑波根俳諧百人一首』の研究

河井 崇宏

室町時代の「俳諧の連歌」を起源とする「俳句」は、今日において、日本文学において重要な地位を占める文芸である。その歴史の上で、大きな転換期とされるのが、明治 22 (1889) 年である。この年、正岡子規によって俳句の革新運動がはじめられた。これをもって、革新運動以前の俳諧を「旧派」と称し、革新された俳諧を「新派」と称し、大きく二分される。今日、文芸的には正岡子規ら「新派」の俳句が評価され、「旧派」の俳句が評価されることはない。しかしながら、俳句は一句一句が独立するものでもあり、個人的な創作活動の一面もあるが、俳諧は「連句」を基本とし、複数の者があつまって一つの作品をつくりあげるといふ集団的な行為である。それゆえ、地域社会においては、俳諧を通じてコミュニティが形成されることが多い。つまり旧派の俳人が詠んだ俳諧は、文芸としては評価が低いとしても、地域のコミュニティやその文化をうかがうのに貴重な資料になりうる。

『筑波根俳諧百人一首』は旧派の俳人が成した俳諧集であり『俳文学大辞典』『茨城俳句史』にも立項されず今日まで研究がなされていない。しかし『筑波根俳諧百人一首』には俳句に加え明治期の俳人名、住所、俳人像が記されており、『筑波根俳諧百人一首』の内容の分析は明治期の俳人、俳諧の研究において意義があり、また地域資料としても価値があるといえる。したがって、これを研究することは「筑波」の歴史・文化研究に意義のあるものと考えられる。

本研究では『筑波根俳諧百人一首』を地域資料として活用できることを目的とする。手法としては原文を翻刻し、画像のデジタル化を行い、また『筑波根俳諧百人一首』に収録された俳人について考察を行った。

内容を調査した結果、『筑波根俳諧百人一首』は明治 37 (1904) 年の出版であり、俳句が 122 句収められていることが分かった。季語を集計すると季ごとの数は春 35 句、夏 21 句、秋 30 句、冬 17 句、新年 6 句であった。多く詠まれている季語としては「梅」があり、現代においても「筑波山梅まつり」が開催されていることから梅に対する愛着が根付いていることがうかがえる。

俳人については茨城県久慈郡の俳人が 55 人と最も多く、当時の現住人口に対する割合を求めた場合も最も高く俳諧がさかんな地域であったと推測される。男女比については男性が 104 人、女性が 10 人であったが、筑波郡については男女ともに 3 人と同じ人数であり地域の特性がうかがわれる。また出版年から 48 人が江戸時代に生まれており、茨城の俳人 33 人が明治維新のおりに 13 歳を超えており元服等を済ませていることが分かり、江戸時代から俳諧を嗜む人がいた地域である可能性が指摘される。

今後は、デジタル化した翻刻・画像とあわせて、どのように公開するかが課題である。

(指導教員 綿抜豊昭)